
鈍感な君へ/沖神

いとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈍感な君へ／沖神

【Nコード】

N6541I

【作者名】

ひとり

【あらすじ】

きつと、君は気付いていないから…

（前書き）

皆様こんにちは。

いとりです。

毎度多数のアクセスありがとうございます。

いとりは只今スランプ気味で、変な作品が多いと思いますが、よろしく願います。

いとり

「返せヨ!」

そう言つて、彼女は手を伸ばした。

放課後の図書室。

する事がなく、暇だったから来てみると、彼女が本を読んでいた。

そして、俺はいつものように彼女にちょっかいを出し、今に至る。

「嫌でさア。」

「眼鏡ないと本読めないアル！！返せクソガキ！！」

飛びかかってきた彼女をヒラリとかわす。

「返して下さい、沖田様””って言ったら返してやりませう。」

「なっ…！？絶対死んでも言いたくないアル！！」

「じゃあ、返しませんゼイ？」

「…！！」

「……ちょっとやり過ぎかな。」

と、自分でもそう思った。

「……だけど、こうすれば君と触れ合えるから、俺は懲りずに、君を構ってしまっただ。」

「何で私にはばかり意地悪するネ……。酷いアル！」

俺の袖を掴む彼女の顔は、今にも泣き出しそうだった。

「わかんないんですかい？」

「へ……？」

彼女の手をとって、指にそっと、口付けをする。

「サっ…サド!？」

「わかれよ。」

そう言っで、真っ赤な顔の彼女を抱き寄せ、軽く口付けた。

「…ちょ…っ…!何すん…!」

でもそれだけじゃ足りなくて、もう一度、彼女の口を塞いだ。

「……ッ。」

逃げないように、腰に手を回す。

時節、隙間から彼女の息と声が漏れた。

そつと唇を離して、彼女に聞く。

「……わかった？」

「……君はきつと、

「……わか……んないアル……。」

―
…気付いていないだろうから、

「俺はあんたが…―」

―
…俺が想いを伝えるよ。

鈍感な君へ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6541i/>

鈍感な君へ/沖神

2010年12月31日04時51分発行